

聖書：コリント人への手紙第二 2：5～11

説教題：愛の確認

日時：2024年9月29日（朝拝）

パウロの前回のコリント訪問は悲しみの結果に終わったことが前回見た2章1節に暗示されていました。そのコリント訪問はテモテからコリント教会の状況が悪化しているというニュースを聞いてパウロが突如行ったものでした。その訪問は思わぬ結果となったようです。どうやらその問題の中心にあったコリント教会のある人がパウロを公の場で、公然と誹謗中傷したようです。パウロの人格と彼の使徒としての権威を攻撃し、罵倒したのです。パウロがそれ以上そこにいることは状況を一層エスカレートさせると思われたからでしょうか、パウロは一旦コリントを退きました。そして当初の予定ではマケドニアへ行った後、もう一度コリントへ戻ることになっていましたが、パウロはそうせず、元居たエペソへと戻りました。そこでコリントではパウロに対するネガティブキャンペーンが一層展開されたのです。彼は再びコリントに来ると言っていたのに、そうしない。彼は「はい」と同時に「いいえ」を言うような不誠実な人間であり、信用ならない男である。彼は使徒などと呼ばれるべきではない！と。しかしパウロがすぐにコリントへ行かなかったのは、前回見た通り、コリント人たちのためでした。今すぐの再訪問は良いことにならないと判断したから彼は予定を変更したのです。そして代わりに涙ながらに手紙を書いたことが前回最後の2章4節に記されました。その手紙を受けた後のコリント教会はどうだったのかが今日の箇所から分かります。

パウロはまず5節で「もしある人が悲しみをもたらしたのなら、その人は私を悲しませたものではありません」と言います。これはもちろんパウロは全然悲しくなかったという意味ではないと思います。彼は公の場でひどく非難され、内心非常に悲しい思いをしたことは間違いありません。しかしそのことが中心問題ではないと彼は言っているようです。Iコリント6章7節で彼は「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいいのですか」と言っていました。単に自分の名誉の問題だけならいかなる侮辱をも甘んじて受ける覚悟を持っているパウロです。彼はそれよりも、今回のある人の行動は「あなたがたすべてを悲しませた」と言っています。Iコリント12章26節に「一つの部分が苦しめば、すべての部分が

ともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです」とありますように、コリント教会の一人の言動はコリント教会全体に大きな影響を与えるものでした。どうやらこの人がパウロを激しく非難した時、コリント教会の他のメンバーは後ろに下がって何も対処しなかったようです。そこでパウロ一人が攻撃されることとなってしまいました。その後、彼らはパウロから涙ながらに書いた手紙、すなわち悔い改めを求める手紙を受け取りました。このプロセスを通して、コリント教会の多くの人々は、パウロに叱責されたからというよりは、自分たちの行動を振り返って悲しんだのです。「ある程度」と言われているのは、全員ではないにしても、多くの者たちがそのように悲しんだということなのでしょう。

そこで彼らは罪を犯した人への教會的な処罰を行ったことが 6 節に記されています。この処罰とはいわゆる教会訓練（戒規）に属することと言えます。罪を犯している人が悔い改めるための神が定めた手段です。この教会訓練（戒規）について語られている代表的な箇所はマタイの福音書 18 章 15～20 節です。そこでイエス様は、もしある兄弟が罪を犯しているのを知ったら、行って二人だけのところで指摘しなさいと命じています。これはもちろん誰かの罪を見たらいちいちそれを取り上げるということではありません。これはそのまま放置したら、その人が救いの道から外れることになりかねない、そういう罪を犯し続けている場合のことです。それを見たなら見て見ぬふりをしない。その場合、なるべくプライベートな形でこのわざに当たるべきことがそこで言われています。気づいた人が二人だけの場で、その人に指摘するのです。もちろん上から目線によってではなく、同じ過ちに陥りやすい兄弟の一人として、相手の真の益を祈り願って行うのです。それでもし相手が聞き入れない場合は、もう一人の信頼できる人を連れて行って関わるようにと言われます。それでもなお相手が罪の生活を続けるなら「教会に伝えよ」と言われています。これは今日に当てはめて言えば長老会に伝えよということです。ここで初めて教會的な、公的な処置がなされることとなります。

しかし今回コリント教会で起こった出来事は最初から公の事柄でした。みんな、ある人がパウロを激しく罵倒し、パウロがこの状況をいかんともしがたく、ここを去ったことを知っています。さてこれをどうするか。この状態をこのまま放置することはパウロを罵倒した人にとっても、コリント教会にとっても良いことになりません。そんな中、パウロは涙ながらにコリント教会が取るべき対処について書いた手紙を送り

ました。コリント人たちは悲しみつつも、パウロの手紙の内容に同意して、罪を犯した人への処罰を実行したようです。そのことがこの手紙の7章11節に次のように記されています。「見なさい。神のみこころに添って悲しむこと、そのことが、あなたがたに、どれほどの熱心をもたらしたことでしょう。そればかりか、どれほどの弁明、憤り、恐れ、慕う思い、熱意、処罰をもたらしたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明しました。」

その戒規はどのようなものだったのでしょうか。ここで処罰と訳されている言葉は叱責するという意味の言葉のようです。おそらくここでなされたのは教会のメンバーシップは保ちつつも、親しい交わりからは除外されるという処置であったと思われます。参考になる箇所としてテサロニケ人への手紙第二3章14～15節にこうあります。

「もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。その人が恥じ入るようになるためです。しかし、敵とは見なさないで、兄弟として論しなさい。」 この「交際しない」とは親しく付き合わないということです。完全無視ではありません。生活に必要な関わりは持って良いのです。しかし私たちはそのあなたの罪の問題を重大に考えているので、この解決抜きに以前のように親しく交わることはできないという態度で関わるのです。その問題解決を本気で求めていること、それを優先して解決すべきであることを伝える交わりをすることです。それを敵としてではなく、兄弟として行うのです。素晴らしいことに、このコリント教会の取り組みは功を奏したようです。当該人物は悔い改めるに至り、パウロはそのことをコリント教会のことを心配しながらマケドニアまで行った時、コリント教会へ遣わしていたテトスから聞きました。その知らせに安堵しつつパウロは今、このコリント人への手紙第二を書いています。

そのコリント教会にパウロがここで勧めているのは、7節にある通り、今は「むしろその人を赦し、慰めてあげなさい」ということです。ここに戒規の目的が示されています。戒規は決して罪を犯した人への懲罰とか、その人を切り捨てるために行うものではありません。それはあくまでその人の悔い改めと回復を願うものです。その目的が達成されたわけですから、「あなたがたは、むしろその人を赦し、慰めてあげなさい」とパウロは言います。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。周りから優しく受け入れられなければ、救いが分からない状態になってしまいかねない。

そこでパウロは8節で「そこで私はあなたがたに、その人へのあなたがたの愛を確認することを勧めます」と言います。彼らは主にある一つの家族です。兄弟姉妹たちです。その愛を確かにするのは、これは公的な手続きを取ることを意味しているのかもしれませんが。教会全体として、その人を受け入れ、愛していることを明らかにする何らかの行動を取ることを意味しているのかもしれませんが。そしてそれはもちろん個々人の交わりにおいても表されるべきでしょう。

後半の9節以降でもコリント人たちへの勧めが続きます。彼は9節で「私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかどうか、試すためでした」と言います。これはもちろん福音に対して従順かどうか、つまり神に対して従順なのか、それとも自分たちの思いに従うのかということでしょう。もし神に対して従順なら、パウロが手紙に書いた通り、神の御心に沿う行動を取らなければなりません。それは教会として戒規を執行する道です。そしてコリント人たちは実際にその道を進みました。その彼らに対してパウロは今、その相手の人を赦すように、と言います。10節の言葉は少し分かりにくく思いますが、これはおそらくコリント教会の中にはパウロのことを思って、パウロを罵倒した人を赦すのが難しいと思う人たちもいたということなのでしょう。あんなにひどいことを言ってパウロ先生を悲しませ、傷つけた人を赦して良いものかと。そんな彼らにパウロは「あなたがたが赦すなら、私もそうします」と述べて、彼らの決定を全く支持すると言っているようです。だから安心してその人を赦すという決定をし、そのように接しなさいということです。パウロのことは心配しなくて良いということです。そして彼は「あなたがたのために」私は赦したと言っています。パウロは終始コリント教会のことを思っていました。ある意味、自分のことなどどうでも良い。彼は自分の名誉回復を求めているわけではありません。彼はコリント教会の祝福を願って喜んで赦したと言っています。そしてそれは「キリストの御前で」そうしたのだと言います。これは原文では「キリストの顔の前で」という表現になっていて、まるでキリストが見ている前でそうしたかのように彼はそうしたということです。キリストの面前で、キリストに導かれて、パウロはそうしたのです。このパウロの思いを受けて、コリント教会は問題の発端となった一人の人を心から赦すべきなのです。

最後にもう一つ大事なことが言われます。それはこのように心から赦すべきなのは

「私たちがサタンに乗じられないようにするため」ということです。反対から言えば、もし赦さなければサタンに付け込むすきを与えるということです。サタンはこれに乗じて教会に分裂・分断を生じさせる。一致と平和をかき乱し、信者同士が互いに敵対し、憎しみ合うようにし、その交わりをバラバラに壊そうとする。そして相手の人を教会から追い出して失わせ、皆が悲しい思いとなり、教会全体が信仰的に落胆するように導く。このようなサタンの策略を私たちは知らないわけではないとパウロは言います。サタンはいつでもそのようにしようと隙を伺っています。ペテロの手紙第一 5章8節：「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」 私たちは教会の中で誰かとの間で問題が生じた時、その人と張り合うことに一生懸命になるかもしれませんが。相手を責め立て、自らの正しさを主張し、論争で相手に勝つことに躍起になるかもしれませんが。しかしその結果、実はサタンが一番勝利するということがあり得るのです。人を赦さない時、そこにサタンが効果的に付け込みます。ですからそうならないように。むしろキリストにある者たち（相手と自分の両方）がともに勝ち、サタンが負けるようにしなければならない。そのための方法は、パウロがここで言っているように相手を赦す道に行くことです。そうして主の教会が勝利を収め、サタンが敗北するようにしなければならない。このことをわきまえている者たちとして行動するようにとパウロは言っているのです。

以上、戒規の必要性和悔い改めた者への赦しについてパウロは語りました。サタンは一方では教会が愛の名のもとに教会訓練を行わず、罪を放置し、教会が聖さを無視するようになることを喜びます。教会から純潔を失わせ、教会を破滅に至らせようとします。一方、教会訓練を行う教会に対しては、その戒規が無慈悲なものとなるように、そう簡単には赦さないという方向へ導くことによって、同じく教会を破滅させようとします。そんな中、パウロは神に従って戒規を行うべきだが、行き過ぎないように！悔い改めた者を進んで迎え入れ、赦し、愛を確認するように！と言っているわけです。

私たちの兄弟姉妹との関わりはどうでしょうか。特に教会が赦す共同体となっているかが今日の箇所を通して問われていると思います。もしそうでなければ、サタンがすぐそばにいます。そこに乗じようと隙を伺っています。私たちはサタンに勝利を与えることがないように注意しなければなりません。私たちは自らがキリストによる赦

しを経験し、神の愛を豊かに示されている者たちとして、互いに赦し合う歩みをする  
ことができるはずの者たちです。キリストを仰ぎ、キリストに感謝し、キリストの面  
前で、自らの取るべき行動を考えて、愛の確認をし合う主の共同体でありたいと思  
います。そしてキリストがもたらしてくださった愛の交わりをいよいよ豊かに味わ  
い知り、キリストを映し出す共同体として成長し、神とキリストに栄光を帰す主の民・教  
会の歩みを導かれてまいりたいと思います。